瑕疵あり出戻りΩな僕に求婚なんて

……本気ですか？

目次

瑕疵あり出戻りΩな僕に求婚なんて……本気ですか？　7
番外編　愛しい香りを集めて　289

character

## ファリオン・クリストフ

ウォレンの兄。
商家の跡取りでα。
ウォレンが離婚されたことを心配し、
とある事情から、学友だった
イサークに知らせを送る。

## ジョセリン・クリストフ

ウォレンの妹でβ。
両親から猫可愛がりされて育った。
Ωのウォレンを疎ましく思っており、
浮気の後に妊娠し、略奪婚する。

## オクトー・スタンホープ

ウォレンの番であり元夫。
ジョセリンと浮気し、
強制的に離婚を突き付ける。
αとしてのプライドが高く傲慢。

## イサーク・コルトハーク

田舎ではあるが広大な
領地を持つ伯爵家の領主。
ウォレンの離婚の知らせを受け、
いち早く駆けつけ求婚する。

## ウォレン・クリストフ

裕福な商家の次男。
『Ωらしく』大人しく言う事を聞くように
育てられたものの、政略結婚をした番に
不妊を理由に離縁された出戻りΩ。
唯一の味方である兄に
会わせたい人がいると言われ……

瑕疵あり出戻りΩな僕に求婚なんて
……本気ですか？

## プロローグ　突然の宣告

「ウォレン、君の妹が身籠ったんだよ。やっと僕に子どもができたんだ。これほど喜ばしいことはないだろう？」

「なにを、突然言って……意味が分からない」

「だから、君の妹ジョセリンと僕の間に子どもができたんだよ。なかなか子どもができなかった僕に待望の子どもだよ？　君だって嬉しいだろう？」

僕の妹との間に子ども？

それは、不倫で不義の子ではないのか？

唖然と言葉も出てこない僕の前で喜色満面の笑みを浮かべ、僕の妹を妊娠させたと報告をしている男性はオクトー・スタンホープ。

僕の夫だ。

この世には第一の性である『男』と『女』がいる。

そして、その中からさらに第二の性である『α』『Ω』『β』がいた。

世の中の大半は『β』であり、『β』は第一の性である『男』と『女』以上の性差はない。

だが『α』と『Ω』は違う。

両者共に『β』に比べて少数であり『α』は知力肉体共に優れた、生まれ持ってのエリート。そして男女共に子を産ませることができる性。

対して『Ω』は肉体的に弱く小さい傾向にあり、男女共に子を産むことができる性だ。

そして、僕は第一の性が『男』であり、第二の性が『Ω』の子どもを産むことができる性だった。

そのため、僕は『男』で『α』であるオクトーと政略結婚ではあるが、昨年夫夫となった。

あくまでも政略結婚、両家の繋がりのため、家のしがらみのための結婚だったが、そんなことはよくある話。

自分で言うのもなんだけど、僕は平民の中では上流階級に連なる裕福な商家の次男でΩだ。

必然的に家のために政略結婚するのは義務と認識していた。

それは僕の実家、クリストフ家より格上の大地主ジェントリ階級の長男で『α』であるオクトーも同じで、互いに納得した上での結婚だったはず。

それなのに、この裏切りは一体なんなんだ。

あまりのことに込み上げる怒りと悲しみ、それから困惑と……

あと、なんだろう？

僕の感情はグチャグチャに掻き乱され、心の中がタールが充満したみたいに重くなる。

「我が愚息が至らないばかりに、スタンホープ家の御子息にはお手数をおかけして申し訳ございません」
言葉に反し、妹の妊娠話に媚びたニヤケ面を隠しもしない父様に、僕は後頭部を押さえ付けられ、無理やり頭を下げさせられる。
実家の応接室のソファーで両脇を両親に挟まれ、テーブルの向かいには夫のオクトーと妹のジョセリンが笑顔で並んで座り、妹の隣に義両親が座っている。
そして、目の前のテーブルの上には記入済みの離婚届と婚姻届が並んでいた。
意味が分からない。
なぜ、僕が頭を下げなきゃいけないんだ？
頭を下げるべきは、夫である僕の妹に手を出し、孕ませたオクトーじゃないのか？
社会通念的に考えればそうあるべきだ。
だけど、僕の家も向こうの家もそうではなかった。
孕む性であるはずのΩの僕が孕まなかったのが悪い、そうだ。
僕らが結婚してから約一年。
その間に『Ω』特有の発情期は数回あり、その度に子作りもした。
それなのに妊娠しなかった僕は不出来な夫だったというのがオクトーをはじめ、両家の見解だった。
だからこの不義理な行動も僕の責任であり、オクトーは僕のせいで『β』ではあるが、女性で孕



むことのできる義理の妹であるジョセリンとの間に子どもを作ったのだと、そう主張していた。
αとΩの子であれば、高確率で優秀なαが望める。
その目論見で僕とオクトーは結婚したが、彼曰く、βとの間でもαが生まれる可能性は十分にある。優秀なαである自分の遺伝子が入っているなら、相手はΩだろうがβだろうがきっと生まれてくる子どもは優秀なαに違いないから問題ないとのたまう始末。
そして僕の両親は彼の行動に、「両家の関係を崩さないためにも、夫の妹であるジョセリンを孕ませ、新たに娶ってくださるという格段の配慮に感謝いたします」と揉み手で感謝を述べていた。
本当に意味が分からない。
夫から衝撃の告白を受けたその日のうちに、僕はもろもろの手続きがあるからと訳が分からないまま実家に帰されていた。
帰った実家では両親からは出来損ない、役立たず、と叱責され、妹からは自分がどれだけ魅力的で、どれだけオクトーに求められ、いかに僕が夫としてふさわしくなかったかを嘲笑いながら語られる。
そして次の日には、夫が義両親を連れて実家へとやって来て……今に至るのだ。
僕は目の前で喜ぶオクトーの笑顔も、勝ち誇った笑顔のジョセリンも見ていられなかった。
だからと言って下げた目線の先にある離婚届と婚姻届を視界に入れることも我慢できず、父親に無理やり下げさせられた頭をそのままに、自分のつま先だけを見ていた。
「お兄様、お辛いかもしれませんが、これも家のためを思えばのことですのよ。オクトー様も孕ま

ぬ男より、妊娠する可能性の高い女のわたくしをお選びになられたのですから、ご理解くださいましょ？」
「大丈夫だよ、ウォレンはちゃんと分かっているから。君は何も心配しなくていいんだ。むしろ僕に子どもが授かったことをウォレンはすごく喜んでくれたんだから。ねぇ？」
「もちろんでございますとも。ウォレンも心より祝福しているからこそ、このように離婚届に記入もしておりますから」
白々しく、有無も言わさず僕に書かせた離婚届を手で指し示しながら父様が笑う。
なんで僕が夫に裏切られ、浮気されてできた子どもを喜んでいるなんて言えるのか。
何が祝福だ。
こんなにも僕を馬鹿にしておいて、何を祝福しろと言うのか。
困惑しつつも憤りを抱える僕を置き去りに、話は勝手に進んでいく。
吐き出したくなる悪態を呑み込む度に、心の中にはどす黒いタールが溜まっていくようだ。
「それでは、この離婚届と婚姻届は僕の方で提出しておきますので」
「重ね重ね、お手数をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします」
オクトーがテーブルの上の二枚の書類を取る紙がしなる音と、父親の媚びた声に膝の上の手を強く握りしめる。
「お父様、お母様。わたくしオクトー様をお見送りしてまいりますわ」
「あらあら、ジョセリンたら。あなたは今、とっても大事な時期なんですから、無理をしては駄目よ？」
「でもぅ、わたくし、お輿入れはまだでも、もうオクトー様の妻ですのよ？　妻たるもの、夫を見送るのも勤めでしょ？」
「まぁ、この子ったら」
「可愛らしいことを言うお嫁さんじゃない。オクトー、よかったわね」
いまだ自分のつま先しか見ていない僕を置いて両家の六人は席を立ち、僕なんていないかのように朗らかな会話を弾ませながら応接室を出て行く。
今回の件は全て息子に任せる、と言って発言を控えていた義父だけが去り際に一言「短い間だったが、息子が世話になったね」と僕に告げ、応接室の扉は閉められた。
短い話し合いの中、誰一人として僕に謝罪の言葉一つかけず、それどころか僕には意見一つ、要望一つ聞かずに、全て決定事項として話は進み、終わった。
こうしてオクトーは元夫となり、僕はαに捨てられた出戻りΩとなってしまった。

## 第一章　人生の分岐路

訳も分からぬまま怒濤の二日間が過ぎた。
そう、たったの二日間。
僕は夫と妹の不義理を知らされてからたったの二日で離婚され、元夫は僕の妹とその場で婚姻を結んだ。
離婚したからには今まで住んでいたスタンホープ邸から出て行くのは当然としても、残されたままの私物を取りに戻ることすら許されなかった。
しかも実家だというのに出戻りΩの僕の肩身は狭く、居場所なんてない。
外にも出られず、結婚前まで自室として使っていた部屋にいるしかなかった。
約一年間空室だった元自室は倉庫のように埃っぽく、ベッドと小さなソファーとテーブルだけでほかには何もない。
そこに、実家に帰された時に辛うじて持ち出した着替えと貴重品を少しだけ詰め込んだ鞄が一つ。
そうして一人になって考えるのは、なぜこんなことになったのか、一体全体何が起きたのか、だった……



僕は別にオクトーを愛していた訳ではない。
それはオクトーも同じで、彼も僕を愛してはいなかっただろう。
だけど、たとえ政略結婚で愛はなくとも、結婚したからには信頼関係は築き上げていきたいと僕は思っていた。
子を作り生涯を共にするのだから、愛はなくとも情は交わせる間柄になりたかった。
だから僕なりに精一杯オクトーに歩み寄ったし、理解し合おうと努力もした。
子を産むのだって僕の仕事で義務だと思ったから、発情期が近づけばオクトーに知らせて一緒に過ごしてもらった。
一般的には発情期での性交だと妊娠はほぼ確実といわれているのに、一年近く妊娠しなかったのは僕だって気にしていたのだ。
だから、妊娠しやすくなるといわれている食品を取ったり、お医者様に何度も見てもらったりして僕の生殖機能に異常がないのも確認した。
なのに、こんな仕打ちってあるか？
信頼関係を築き、よき関係であろうと思っていたのは僕だけだったのか？
結婚前なら何も思わなかった。
「ああ、そうなんだ、よかったね。じゃあ、お幸せに」
そう割り切れた。
だけど結婚して一年も経つ今、そんなあっさりと受け入れられるはずがないじゃないか！

僕にだってプライドがあるんだ！
実の妹と不倫されて離婚なんて……しかも妊娠までさせて。それがどれだけ僕の自尊心を傷つけたか……
自分の存在全てを馬鹿にされて軽んじられる行為に、誰が笑っていられるんだ!!
それだけじゃない。
最悪なことに、オクトーは僕の項(うなじ)を噛んで番(つがい)になっている。
番を解除されてしまったΩがどうなるかも分かっているはずだ。
番を解除されたΩは体と心が新たな番を作ることを拒む。
しかも年々ひどくなるヒートの度に失われた番を求めて苦しみ、精神を病んでしまう。そして、その苦痛に命を削られ死んでいく。
反してαは何も弊害がない。
何度でも、何人でも番を作り、捨てることができる。
幸か不幸か、僕はまだオクトーから番を解除されていない。
番を解除されたら、僕は番を求め心を壊し死んでいくだけ。しかしそれはあまりにも忍びない、だから、あえて番を解除しないというのがオクトーなりの『恩情』らしい。
それに番相手以外でもΩは妊娠できる。
ならば優秀な子を産むΩが欲しいと望むαに、再度嫁ぐこともできるだろうと……
なんて……なんて残酷な……なにが恩情だ!!



「妊娠しないから離婚された」
「項に噛み痕がある」
そんな瑕疵(かし)のあるΩを欲しがる者なんている訳がないじゃないか!!
いたとしても、それは……まともな相手じゃない。
それなのに……元夫も両親も妹も、僕を切り捨てた。
αの父様とβの母様といえど、それが分からないはずがないのに。
まるで使えない道具を交換するかのように、簡単に僕を今まで組み込んでいた歯車から外した。
その結果、僕がどうなろうと知ったことではないとばかりに……
両親からは普通に親と子として愛情を貰い可愛がられていたと思ってたんだけどな。
どうやら両親的には、家のための一つの駒としか思われていなかったみたいだ。
今まで僕を育ててきたのも、優しく時には厳しく接してくれていたのも、全ては僕が家にとって利用価値のあるΩだったから。
そのΩが使えない、となれば……それはただの不良品。
今回のことで、よく分かった。
妊娠もしない役立たず、捨てられた駒に与える情はないってことが。
これから僕は一体どうなるんだろう。
不安が怒りや悲しみと混ざり合って、どんどん心を重たくする。
誰かの番になり子を産むのが仕事だとしか教えられていなかったせいで、僕は一人では生きる術

を持たない。
持てないように育てられたのだと今なら分かる。
分かったところでどうしようもないけど……
僕は溜息を吐いて項垂れた。
ベッドに腰掛けた僕の足元にある、この小さなボストンバッグが今の僕の全財産。
スタンホープ邸にある私物を全て渡してもらえたとして、それらを全て売り払っても大した額にはならないだろう。
実家から逃げ出して一人で生きていくにも、稼がなければ数か月でお金が底を付くのが目に見えている。
考えれば考えるほど、心の中で充満してこぼれ出したタールが全身を重くした。

一方的な離婚を押し付けられた日から今日で一週間。
その間にジョセリンは大量の荷物を荷馬車に乗せ、スタンホープ邸へ住まいを移した。
最後まで彼女は僕を嘲笑い続け、罪悪感も後ろめたさも全くない様子だった。
僕とオクトーが結婚する時もずっと「Ωってだけで優秀なαと結婚できるんだからズルい」「お兄様がΩじゃなければ、わたくしが結婚していましたのに」と言っていた彼女だ。
Ωが疎ましいのか、僕が嫌いなのかは分からないけど、何かと突っかかっていたから、今回の結果は彼女の優越感を満たしたに違いない。



この不倫がどちらから持ちかけられたのか知りたくもないが、双方共にこれが望んだ結果なんだろう。
一方、僕はいまだに部屋から滅多に出られず、食事も部屋に運んでもらい、日がな死刑宣告を待つ囚人のように過ごしていた。
使用人達はそんな僕を遠巻きにして腫れ物に触るように接する。
両親からも疎まし気に見られ、いつ今後の処遇を告げられるかと思うと、怖くて部屋の外に出たいとさえ思えなかった。
何もない僕の心のように伽藍洞な部屋の中、泣けばいいのか怒ればいいのか分からないほど感情が乱れる。
そしてそれは少しずつ、絶望の色に塗り替えられ始めていた。

「ウォレン、お前に話したいことがあるんだが、いいか？」
ソファーに座り、ぼんやりと窓から空ばかりを見ていた僕の耳に聞こえた、控えめなノックの音と優し気な声。
開いた扉から顔を出したのは長男のファリオン兄様だった。
昔から何かと僕に食ってかかる妹と違い、兄様はいつも僕に優しかった。
第二の性がΩと判明してから、外出もままならない僕のために、いろいろな外の話を聞かせてくれたり気を遣ってくれたりしていた。

そして今も、兄様だけが以前と変わらずに僕に接してくれる。
「また食事を残したって？」
「ごめん」
あんなことがあってからというもの食欲なんて湧くはずもなく、僕は用意される食事の半分も食べられないでいた。
良くないことだとは思ってはいても心と体はついてこなくて、無理をして食べれば気持ち悪くて吐きそうになる。
それで吐くくらいなら、と残していたのだけど……
そのことが兄様の耳に入ってしまっていたようだ。心配をかけてしまったと自責の念に肩が落ちる。
「食欲がないのは分かるが、もう少し食べた方がいい。日に日にやつれていくお前が心配で、俺も食事が喉を通らなくなってしまいそうだ」
「本当に、ごめん……」
「すまん、少し意地悪な言い方をした。ウォレン、謝るな。お前が悪いんじゃない。悪いのはジョセリンとオクトーだ。それに両家の親も……とにかくお前は食べろ」
そう言うと兄様は手に持っていた小瓶を僕に見せ、「これなら食べられるだろ」と蓋を開ける。
中にはキラキラと光る粒を纏ったオレンジ色の小さな半月がいくつも詰まっていた。
「オレンジの砂糖漬けだ。まだ浅いが、少し酸味がある方が好きだろ？」



それはオレンジの実を一房一房、丁寧に皮を剥いて砂糖に漬けたものだった。
僕は小さな頃に風邪を引いたり体調を悪くしたりすると、決まってこのオレンジの砂糖漬けをねだっていた。どんなに熱があって食欲がなくてもこれだけは不思議と食べられたのだ。
兄様はそれをよく知っていて、僕が体調を崩すと必ずどこからか調達してくれていた。
それを、こんな時にも持ってきてくれるなんて……
（兄様は僕を子どもだとでも思っているのか？）
そんなことを思うところが子どもっぽいんだと分かっていながらも、素直になれない僕は心の中で憎まれ口を叩く。
それでも僕の手は勝手に兄様の持つ小瓶へと伸び、冷たい感触のそれを受け取っていた。
今すぐここで食べろと言わんばかりに小さなフォークまで手に握らされ、知らないうちにほころんだ唇を開き、一房口の中に入れる。
口に含んだ途端、砂糖の甘味が舌の上に乗り、すぐにオレンジの酸味と果汁が口いっぱいに広がり、するりと喉を通っていく。
食事をしてもまるで粘土を飲み込んでいるようだったのに、これは一口食べる度に乾いた体の隅々まで潤う気がした。
「うまいか？」
「美味しい……すごく美味しいよ、兄様……」
スタンホープ家では食べられなかったオレンジの砂糖漬け。

たった一年でしかないはずなのに、ものすごく懐かしく感じるその優しい味に、僕の目からポロリと涙が落ちる。
一滴落ちると、もう止まらなかった。
泣きたくても泣けなかった涙が堰を切ったようにあふれ出す。
それと一緒にタールに塗(まみ)れて固まった僕の心が、ほんの少し、兄様の優しさのおかげで溶けた気がした。
嗚咽を漏らしながらオレンジの砂糖漬けを食べる。
その間、兄様は嫌な顔もせず、ただ黙って側にいてくれた。
小瓶の中身が全てなくなった頃、兄様が真っ白なハンカチで僕の濡れそぼった顔を拭ってくれる。
まるで本当に小さな子どものような扱いだ。
普段だったら子ども扱いしないで、と文句の一つも言っていたかもしれない。だけど、今はその優しい甘やかしが傷ついた僕の心に沁(し)み入る。
僕の手の中にある空の小瓶を受け取った兄様が、そっとテーブルに置く。
それをぼんやりと眺めて、兄様が話があると言って僕の元へ訪れていたことを思い出した。
僕が突然泣き出したりなんてするから、兄様は話もせずに待ってくれていたみたいだ。
「ごめん、兄様。話があって来たんだよね」
これ以上時間を無駄にしては悪いと、少しでも早く話を聞こうと鼻をすすり姿勢を正す。
「いや、構わないよ。俺こそ、ウォレンがこんな謂(いわ)れのない仕打ちを受けているのに何もしてやれず、すまない」
「ううん、兄様のせいじゃないから」
それでも申し訳なさそうにする兄様に、気にしないでとかぶりを振る。
原因は、子どもを産めなかった僕なんだから……
その事実を改めて思い出し、折角溶けた心の中のタールが、また固まり重くなったように感じる。
「その件はまた今度話そう。今は別で急ぎの話があるんだ。ウォレン、時間がないから端的に言う。父様はお前を身売り同然で、どこかに嫁がせようとしている。十中八九、碌(ろく)な相手じゃない」
兄様の話は予想していた通り、今後の僕の処遇だった。
誰かの番になったままのΩの行く末なんて、花街で身を売るか、どこかの悪趣味な男の元に飼われるかだ。
覚悟はしていたけど、実際に聞くとやはり辛いな。
「そっか……覚悟は、できているよ」
実の父親からの非情な扱いにグラつきそうになる体に力を入れて、せめて無様でないように、グッと歯を食いしばる。
「ウォレン、俺はお前をそんなところへ嫁がせたくはないんだ。今回のことだって、俺は納得していない。ジョセリンもオクトーも、父様も母様もおかしい！　なぜウォレンに全ての責任を負わせ、犠牲にして平気な顔ができるのか!!　お前は何も悪くない、何の責もない。謝罪し、責を負って償うのはあいつらの方なんだ！」

全てを諦め俯く僕の両肩を掴んだ兄様が声を荒らげる。
僕のために、こんなにも怒ってくれる兄様に一度は止まった涙が再びあふれそうになる。
誰もが僕を責める中、兄様だけでも僕に非はないと言ってくれて、それだけで僕はもう満足だ。
どこに行かされたとしても、僕には兄様という味方がいたという事実だけで救われる。
「ありがとう、兄様……その気持ちだけで――」
「だからウォレン……一度、俺の友人に会わないか？　このまま、あいつらを思い通りにさせていていい訳がないんだ」
「え？」
「イサーク・コルトハークを覚えているか？」
「確か……兄様のご学友だったと」
裕福な商家の跡取りでαでもある兄様は、貴族のご子息も集う学園に通っていた。
学業だけでなく、家業の商会の繁栄のためにも良い家柄のご学友と懇意になってこい、という意味もあったのだろう。
そんな学園生活の中、兄様が特に仲が良く、親しくしていた貴族のご学友に、イサーク・コルトハーク様という方がいた。
何度か家にも遊びに来られていたので覚えている。
一目見ただけでαだと分かる恵まれた体躯と優れた容姿、何より威風堂々とした風格を持った方だった。



同じαである兄様やオクトーと違って遠く離れていても分かる威圧感に、これが貴族のαなのかと思った記憶がある。
その頃には僕の第二の性はΩだと判明しており、家族以外のαの側には近づいてはいけない、と言われて、いつも遠くから挨拶をするだけだったけど。
「その方とお会いして、どうするの？」
「お前さえよければ、イサークと結婚しないか？」
「え？」
結婚？　こんな瑕疵しかないような僕と、貴族であるイサーク様が？
青天の霹靂とばかりな突然の突拍子もない話に、滲んでいた涙も止まる。
「あいつはいい奴だ、それは俺が保証する。少々堅物な部分もあるが、誠実で嘘は吐かない。それに相手には一途だしな。今、あいつは伯爵家を継いでコルトハーク領の領主だ。父様が選ぶ碌でもない相手に嫁がされるより、イサークの元に行った方がお前のためになる」
「待って兄様！　突然そんな……僕と結婚だなんて、イサーク様に失礼だよ。僕は番持ちなんだよ？　それに、一年間妊娠もしなかった……僕みたいな瑕疵があるΩを、そんな立派な方に押し付けちゃ駄目だ」
僕を不憫に思ってくれたんだろう兄様の気持ちは嬉しいけど、それは無理がある。
いくらご友人だと言っても相手が伯爵家の当主様とあっては、あまりにも失礼過ぎる。
「俺は押し付けちゃいないさ。あっちからの申し出だ。お前と結婚させてくれってな」

「そんな、馬鹿な話……何かの間違いじゃ」
「間違いじゃない。お前が離婚されたと知って、すぐに俺に連絡が来た。お前の番の件も、不妊も伝えてある。それでもイサークはお前との結婚を望んでいるんだ」
「……」
にわかには信じられない話に言葉を失い黙る僕に、兄様は言い含めるように言葉を続ける。
「ウォレン、あいつはお前を粗末に扱うような男じゃない。この話はお前にとって悪い話じゃないはずだ」
兄様の言うように、確かに僕にとって悪い話じゃない。
それどころか、これ以上のない話だと思う。
だけど……
迷う素振りを見せる僕に、なおも兄様は言葉を続ける。
「父様がお前に宛がおうと考えている男がどれほどの地位があるかは知らないが、イサークならそれを撥ね付けることだって可能だ。父様はコルトハーク伯爵家がお前との婚姻を望むなら諸手を上げて喜ぶんじゃないか？　あの人はステイタスは高ければ高いほど好きだからな。むしろ率先して話を進めそうだよな」
ハンッ、と兄様が乾いた笑いをこぼす。
そこには明らかな父様への蔑(さげす)みが含まれていて目を剥く。
初めて見る兄様の表情には、時間をかけて蓄積した苛立ちがクッキリと表れていた。



「ただ、俺もあいつも無理強いをするつもりはない。ウォレンがどうしたいのか、その意思を尊重する。だがな、ウォレン。お前が望みさえすれば、この家からお前を連れ出せるんだ」
矢継ぎ早に告げられる話の数々に頭が追いつかない。
兄様は本気でこんな話をしているのか？
イサーク様とは数年前に何度かご挨拶をしたことがあるだけで、お話しすらしたことがないのに、そんな方からの縁談の申し込みだなんて。
オクトーと結婚する前なら、まだ格上のお相手からの申し出に戸惑いはしても「はい」と頷いたかもしれない。
けど今は……
「僕なんかと結婚して、何の利点があるって――」
「そうじゃない。イサークはメリット、デメリットで結婚したいって言っているんじゃないんだ。それでもあえて言うなら、お前との結婚こそが、あいつにとってのメリットなんだろうな。ま、難しく考えずに一度会うだけでもしてみないか？　会ってみないことには何も分からないだろ？」
兄様はそう言うと、まるで僕が答えを出すのを待つかのように、ゆっくりと向かいのソファーに腰を下ろした。
「それは……そうだけど……」
会ってみないと分からない、か……
確かに、僕もイサーク様に会って話さなければ彼の考えが分からないように、イサーク様も僕に

会って話さなければ分からないこともあるだろう。
どういうつもりで僕なんかに結婚話を持ち込まれたのかは知らないけれど、話してみると思ったよりも面白みのない、つまらない人間だと気付くかもしれない。
それに、これまでの僕の人生は全て決定済みで進められてきた。
僕の意見も意思も聞かれたためしがない。
兄様とイサーク様が僕の意思を尊重すると言ってくれるなら、結果がどうあれ、会うのも悪くないかもしれない。
だったら人生で最後になるかもしれない分岐路くらい、僕の意思で決めようかな。
「分かった、兄様。イサーク様にお会いするよ」
「本当か⁉　よし！　それじゃ、早速明日……いや、今日の正午過ぎなんてどうだ？」
「は？　ちょっと、兄様⁉　そんな急すぎるって！　もう昼前だよ⁉　それにイサーク様の領地とここの距離を考えたら今日なんて無理だ！」
「あいつ、実は昨日からこの街に来ているんだ。だから問題ない」
「はい？」
昨日から？　それは何か仕事で？
だとすれば余計に仕事の邪魔をしては悪いんじゃ……
「あのバカ、昨日急に俺に縁談の直談判しに来たんだよ。父様に言うとウォレンの意思に関係なく縁談を決めかねないから、ってさ」



「兄様に直談判？　貴族の当主様が、ただの平民に縁談を申し込むためにわざわざ来られたっていうのか⁉」
「そうだ。な？　馬鹿みたいに誠実な男だろ？」
信じられない……
でも、それが本当なんだとしたら、確かに真面目で誠実な方だ。
そんな方が、なぜ僕なんかに求婚だなんて、なおさら不思議で仕方がない。
「だから、呼べばすぐ来る。それに今なら父様も母様もいないし好都合だ。では、俺は今からイサークのところへ行ってくるから、お前は家で待っていてくれ」
ソファーから立ち上がり、忙しない様子で服装を整えた兄様が座ったまま唖然とする僕の肩を叩く。
「ちゃんと昼食は食べるんだぞ？　顔色の悪いままではイサークが心配するからな」
「わ、分かった」
兄様の言うように、結婚を申し込みに行った相手の顔色が悪いのは印象が良くない。
昨日、今日で僕のために動いてくれた兄様のためにも、きちんとした姿でイサーク様に会うのが礼儀だろう。
丸まっていた背筋を伸ばした僕は、ぎこちないながらも笑顔を浮かべる。
「兄様、ありがとう」
「礼を言うのは俺の方だ。イサークと会う決心をしてくれてありがとう。使用人達には俺から来客

があると伝えておくから、お前は素知らぬ顔をしていろ」
「はい」
頷く僕の髪をクシャリと掻き混ぜて速足で部屋を出て行く兄様を、僕は初めて自分の意思で下した決断に高鳴る胸を抑えて見送った。



## 第二章　再逢

正午過ぎ、本当に兄様はイサーク様を連れて帰宅した。
使用人達は兄様から友人が来るとは聞いていたが、それが貴族だとまでは聞いていなかったらしく、家の中がどことなく慌ただしい。
使用人達が慌てて準備をする中、兄に連れられてイサーク様の待つ客室へと向かう。
途中、慌てふためく使用人が気の毒になり、お客様は貴族だと伝えておくべきだったんじゃないか？　とそれとなく聞いてみる。
基本、貴族のお客様は父様の経営する商会の店舗の方へ行かれるから、家の使用人達は貴族のお客様なんて慣れていない。
事前に分かっていたら違うだろうけど、こうも急だと……それに、おもてなしが行き届かないなんてことになったら、イサーク様にも失礼ではないだろうか？
なのに、兄様はどこ吹く風で……
「貴族が来るなんて言って、使用人の誰かから父様の耳に入ってみろ。喜色満面のニヤけた父様が職場からすっ飛んでくるぞ。それは嫌だろ？」

と言われ、なるほどな……と悲しいけど納得してしまう。
僕が離婚されてからの父様を見ていれば嫌でも想像がつくその姿に、ゲンナリと気分が重くなる。
そのことを即座に予想できるなんて、兄様は一体いつから父様達の本質を見抜いていたのか。
両親の愛情が偽りだとも知らず、僕がのうのうと暮らしていた間、兄様は一人どんな思いを抱いて過ごしていたのだろう。
それを考えると、自分は何も考えず、ただ薄ぼんやりと生きてきたことが情けなくて、腹立たしささえ感じる。
「本日は急な来訪にもかかわらず、お時間をいただき感謝しております。学生の頃に何度かお見かけした時以来ですね。今日はお会いできて……本当によかった」
「いえ……お久しぶりでございます。ウォレン・クリストフです。いつも兄がお世話になっております」
「お前達、硬いよ」
イサーク様の挨拶と僕の返事に兄様の呆れた声が溜息と共にかかる。
硬いと言われても、僕は家族以外の男性にもαにもあまり免疫がないのだから、多少ドギマギしてしまうのは大目に見て欲しい。
それに、数年ぶりにお会いしたイサーク様は、以前お見かけした時よりも背が伸び、体つきも逞しい男性に成長されていた。
これほど体格のいい人なんて、僕は街の門番や王都から来る兵士くらいしか見たことがない。



加えてイサーク様からは平民にはない洗練された大人の雰囲気が漂う。
そんな方とテーブルを挟んだ向かいに座らされ、凛々しく整った顔貌に真っすぐ見つめられては緊張するなと言う方が無理だ。
「ウォレン、そんなに緊張しなくても大丈夫だ。いくらコイツでも、急に取って食ったりはしないさ」
「ファリオン、変な言いがかりはやめてくれ」
兄様の横槍にイサーク様が不満気にジトリと兄様を睨む。
だというのに、当の兄様は別段悪びれた様子もなく、肩をすくませただけでいたずらっぽい笑みを浮かべ、部屋の中に控えたままの使用人達に退室を促す。
しかし使用人達は僕とイサーク様をチラチラと見ては戸惑った表情をするばかりで、なかなか退室しようとしない。
きっとαのイサーク様とΩの僕が近くに、それも個室で一緒にいることを気にしているんだろう。
「お前達の思うようにイサークはαだが、ウォレンは番持ちだ。間違いは起きない。それに俺も一緒に同席しているんだから何の問題がある。大事な話があるんだ。出て行ってくれ」
使用人達の戸惑いに気が付いた兄様の言葉でやっと納得したのか、皆が礼を取って退室する。
確かに番がいる僕には、もうほかのαのフェロモンを感じられないし、僕のフェロモンを誰かが感じることもない。
お互いに何も感じないのだから、誘発されてのヒート事故も起きない。

それは事実だし、しょうがないと割り切っているつもりだったけれど、縁談の話をしに来られたイサーク様の前で言われると少々バツが悪い。
「ファリオンから話は聞いているかな？」
僕はいつの間にかまた自分のつま先だけを見つめて俯いていたらしい。
顔を上げ、微笑むイサーク様へと視線を向ける。
「はい、お伺いしております」
「そうか。急な話で戸惑っているとは思うが、私は真剣に君との結婚を望んでいる。どうか前向きに考えてはもらえないだろうか」
「あの……イサーク様は、僕の事情を兄様から聞いているとは思うのですが――」
兄様は僕の現状を伝えたとは言っていたけど、それでもなお、イサーク様のような方が僕なんかに縁談を持ちかけるなんて、にわかには信じられない。
もしかしたら、ちゃんと伝わっていない可能性もあるんじゃないか？
そう思い、意を決して僕からも自分が不妊であること、前夫と番っていることを伝えようとしたが、続く言葉をイサーク様に遮られてしまう。
「聞いているよ、全て。君の離婚理由も番われたままなことも。それに関して私は相手方にも君の御両親にも強い憤りを感じている。君をそんな目に遭わせた連中を、私は許せそうにない……」
「なぜ……そんな僕なんかを……」
「なぜ？」



「だって……不妊の番持ち。しかも、離婚された上に平民なんですよ？　そんな僕がコルトハーク伯爵家当主のイサーク様と結婚なんて……分不相応過ぎます。それに、僕なんかと結婚したらイサーク様が周りから何て言われるか」
言葉にすると改めて自分には瑕疵しかないと認識してしまい、気持ちが沈む。
「僕なんか、なんて言うもんじゃない。それに身分は関係ないよ。私が望んだ相手と結婚して何を言われるんだ。そんな奴は私が誰と結婚したって言うさ。ただ、君を悪く言うなら、私はその者を許しはしないだろうね」
「でも……僕は不妊です。跡継ぎを産むという、大事なお役目を果たせません」
「医者からも不妊だって言われた？」
「いえ……お医者様には何度か診ていただいて問題はないと……。でも、約一年間妊娠できず、それが理由で離婚された身ですので――」
Ωの存在意義は子どもを産むこと……
お医者様から問題はない、と、いくら言われたところで結果が全て。
何度もヒート時に抱かれたのに妊娠しないんじゃ、不妊なのは事実だ。
覆すことのできない非情な現実に、膝の上に置いた手をズボンを巻き込みながら強く握りしめる。
「それだったらまだ分からないんじゃないかな？」
「!?」
「不妊だと医者が言っていないなら、将来できるかもしれないだろ？　それに、別に私は自分の子

どもを持つことにこだわりはないよ。親戚筋に優秀な子は何人かいるし、跡継ぎには困っていないんだ」
「ですが……僕は番われた、ままです。イサーク様の匂いも分かりません。僕のフェロモンも、イサーク様には届きません。それにもし番を解除されたら……僕は数年と耐えられずに……死ぬような人間です」
結婚したとて、すぐに死ぬ可能性のある不妊のΩに価値なんてない……
「それだけはさせない!!」
突然声を荒らげ立ち上がったイサーク様の剣幕に、俯きがちだった僕の背筋がビクッと伸びる。
今まで穏やかに、そして冷静にしっかりと返答していたイサーク様が足運びも荒々しく僕に大股で近寄ってくる。
八つ当たりに近いような、荒んだ気持ちのまま否定的な発言ばかり放った自覚はある。
僕の失礼な行動に遂に怒りを買ったか、と身構える僕の横でイサーク様は、おもむろに跪くと強く握りしめた僕の両手を大きな手で優しく包み込んだ。
「番の件は、絶対に私が何とかする。強制解除だってさせはしない。必ず、番の縛りから解放させる。だから私を信じて任せて欲しい。必ず君を守ってみせるから。だが、もし……」
何かを言い淀むイサーク様に伴うように、優しく僕の両手を包み込んでいた手に力が入る。
「もし、君がまだ番を愛していて、どんな形でも繋がっていたいと願うなら、そのままでも私は構わない。私は君のフェロモンが欲しいんじゃない、ウォレンが欲しいんだ」



思いも寄らないイサーク様の言葉に驚き、さっきまでの自暴自棄な感情どころか、思考までもが吹き飛んだように真っ白になる。
何か言葉を……と思うけれど、口がハクハクと動くだけで何の言葉も出てこない。
ただ無言でイサーク様と見つめ合う。
熱の籠ったイサーク様の眼差し、それと僕の両手を包む大きな手の熱に、だんだんと心臓が早鐘のように鳴り響き始め、頬がカーッと熱くなる。
『Ω』として家の中で静淑に暮らしてきた僕にとって、オクトーを含め家族以外の男性αにこんなに近くに迫られるのは勿論、手を握られるのだって初めてのこと。羞恥と戸惑いに耐えきれず咄嗟に顔ごと下を向いて目線を逸らす。
まるでプロポーズのような言葉に動揺を隠せない僕は、何度も言葉を探っては生唾を飲み込む。
いや、結婚の打診に来られているのだから、プロポーズの言葉でもおかしくはないけれど……
「元夫を、あっ、愛しているとかはないです！ お互いに政略結婚ですから、そこは長男と次男の義務というか……それに、番の強制解除は一応するつもりはないと。それが『恩情』だとか言って……碌な奴じゃないでしょ？ だから、そんな奴に関わっては駄目です。イサーク様にご迷惑しかおかけしませんから」
戸惑いや気恥ずかしさを隠したくて、少し不愛想に顔も上げずに答える。
いくら貴族であるイサーク様でも番の縛りを何とかするなんて無理だ。
他人にどうこうできないからこその番だ。

それに姑息なオクトーのこと。どんな迷惑をかけるか分かったものじゃない。
『恩情』？　なんとも、ずいぶん思い上がったことを……確かに碌でもない相手のようだな。だったらなおさら、私はウォレンを守るために側にいたい。君はそんな奴に都合よく扱われていていいのかい？　好き勝手にされたままで、悔しくはないのかい？」
好き勝手にされた、まま……？
その言葉が胸の中に詰まったタールを掻き回すようにグルグルと渦巻く。
そんなの、嫌に決まっている。誰が好き好んでこんな理不尽な扱いをされたいもんか！
「悔しいですよ!!」
ずっと心に詰まっていた言葉が僕の口から飛び出す。
「僕という存在全てを軽く扱われて、馬鹿にされて……本当は嫌で悔しくて、辛くてたまらない。憎い相手に命を握られ、いつ狂い死ぬのかと恐怖に耐える毎日がどれだけ苦しいか！　だけど、どうすればいいのか分からないんです……戦いたいのに、戦えない。逃げたいのに、逃げ方も知らない」
「だったらなおのこと、私を利用したらいい。私ならその望み全てを叶えてあげるよ」
「なんで、そんな……僕なんかに関わって、イサーク様に何の得があるんですか？」
感情のままに嫌な言い方が口をつく。
イサーク様が嘘を言っているとは思っていない。
兄様からも信頼のおける人物だと聞いていたし、疑っている訳でもない。



でもだからこそ、僕にばかり好条件で、イサーク様には一切の利点が見出せないこの結婚にどんな意味があるのか疑問が募る。
もともと大して期待していなかった結婚話だ。これで気分を害されて流れても仕方がない、と下を向き続けていた視線を上げてイサーク様を見る。
「ウォレンが、私と結婚してくれることこそが、私の得だよ」
僕の無礼な物言いに、少しくらいは不快そうな表情を浮かべるかと思っていた。
けれど予想に反して蕩けるような甘い笑顔でそう言い切ったイサーク様に、僕は言葉を失う。
僕なんかと結婚して得なんて、本気で言っているのだろうか？
「イサーク、ウォレンの手を離せ。それに近い」
兄様の手が唖然としたまま動けない僕の横から伸び、イサーク様の手をペシリと叩く。
「す、すまない!!」
慌ててイサーク様が僕の手を離す。
僕も兄様に言われるまで話に熱中しすぎて、イサーク様に手を握られていたことをすっかり忘れていた。
しかも顔も近くて……今さら襲ってくる羞恥に顔が火照り胸がドキドキする。
「離れろ、座れ」
兄様がシッシッと犬を追い払うようにイサーク様に向かって手を振る。
そんな兄様の態度にイサーク様は苦笑いを浮かべ、大人しく向かいの席に戻って座り直す。

平民の兄様が貴族のイサーク様にする行為としては不敬すぎるけど、イサーク様が怒らないところを見ると、本当に二人は仲がいいらしい。
友人らしい友人もいない僕には、そんな二人の関係が少し羨ましい。
「あの……イサーク様は結婚にあたり、僕に何を望んでおられるのですか？」
居住まいを正し、改めて向かい合う。
「そうだね。私は君と幸せな家庭を築きたい。そのためなら努力は惜しまない。だから、君に望むのは、君自身が幸せになることだよ」
「幸せ……」
「ウォレン、先ほどの言葉は本気だよ。私はウォレンとの結婚こそが望みなんだ。君以外はいらない」
イサーク様が真っすぐ僕を見つめる。
僕はその言葉にすぐには答えられず、膝の上でまだイサーク様の温かさが残る手を握りしめる。
今までのイサーク様の言葉の数々を思い出し、整理しようとするけど、あまり上手くいかない。
ただ一つ分かるのは、理由はどうあれイサーク様は僕との結婚を本気で望んでいるらしい、ということ。
そうなると、今まで心のどこかで無理だ、と諦めていたことが急に現実味を帯びてきた。
もしかして、イサーク様なら本当に僕をこの家から連れ出してくれる？
この家からも、両親からも、オクトーからも、妹からも、僕を解放してくれる？



本当に、僕はαの慰みものになるだけの結婚から逃げられる？
震えそうになるほど激しく打ち始めた胸の鼓動を落ち着かせようと、出されたまま放置していたティーカップを手に取り、口元へ運ぶ。
冷えてしまったせいか、僕がいつになく緊張しているからか、いつもの紅茶の香りとは別に、微(かす)かにだけど甘くて濃厚な……そう、スターアニスのような香りがする。
でも決して嫌いな香りではない。
嗅ぐとなぜか胸の奥が熱くなるような、そんな不思議な香りだった。
紅茶に何かスパイスでも入っているのか？
でも味はいつもの紅茶のままで、内心首を捻(ひね)りつつもカップを置いた。
不思議な香りに後押しされ、口を開く。
「イサーク様は、本当に僕でよろしいんですか？」
「ウォレンがいいんだ。本来なら、きちんと手順を踏んで君に求婚したかった。だが、また君がいつ、どこのどいつとも分からない相手に嫁がされるかもしれないと焦った結果、こんな形になってしまったのは申し訳ないと思っている。……だが、今は私を利用してくれないか？　このままこの家にいても君は都合のいい道具にされるだけだ。私と結婚すればこの家から連れ出せる。私の身分があれば君の元夫も家族も手出しができない。どうか、私の手を取ってはもらえないだろうか？」
そう言うと、イサーク様は僕に手を差し出した。
テーブル越しに伸ばされた大きくて厚みのある手は、僕に選択を求めてきている。

その手が僕のこれからを左右するのだと思うと、ものすごく厳かなもののように感じる。
初めて僕の意思を聞いてくれた存在に、僕は一呼吸の後、そっ……とゆっくりその手を取った。
「僕は、もうこの家にはいたくありません。誰とも分からない人へ嫁がされるのも嫌です。イサーク様は、本当に僕をこの家から、両親も元夫も妹からも僕を逃がしてくださいますか？」
「もちろんだ！　イサーク・コルトハークの名にかけて、ウォレンをこの家から連れ出し、君を害そうとする者全てから守ると誓うよ」
僕の手を強く握り返し、身を乗り出して答えるイサーク様に一切の澱みはない。
変わらず真っすぐ僕を見つめる目に引っ張られ、僕の口からは承諾の言葉がこぼれ落ちた。
「分かりました。イサーク様との婚姻のお申し出、謹んでお受けいたします。この御恩は必ずお返しいたします」
「あぁっ、ありがとう！　必ず幸せにする!!　ウォレンがこの選択を後悔しないように、私の全てを君にかけよう」
僕の言葉にイサーク様がパァッと弾けるように破顔する。
途端、凛々しかったお顔が無邪気な少年のように変化して、意外なお姿に驚く。
僕なんかとの結婚にこんなに喜ばれるなんて、不思議でしょうがない。けれど、それ以上に嬉しいとも感じた。
不良品として必要ないとされていた僕が求められたこと。
そして自らの意思で自分の未来を選択できたこと。



それらがとても嬉しくて、僕の口角が自然と上がる。
「まずは一安心だな。後は父様の了承さえ取れれば……だが」
兄様の呟きに、最終的な決定権は父様にあることを思い出す。
ここで父様が『良し』と言わなければ何も意味をなさない。
途端不安に駆られ、上がった口角が強張る。
「何がなんでも了承は取るさ。ウォレン、不安は多いだろう。だが、私が必ず何とかする。どうか私を信じてくれ」
「……はい。僕は、イサーク様を信じます」
いまだ握られたままの手が熱い。
気が付くと、あんなに重く固まっていた胸が熱く、タールが溶けて流れ落ちたみたいに軽くなっていた。
「では、早速クリストフ家当主との目通りは叶うかな？」
「いいとも。今から使いを出そう」
「え？」
イサーク様の求婚をお受けするにしても、父様には後日、僕との婚姻の申し込みを送られるのかと思っていた。
しかしイサーク様は今日、直接父様に願い出ると。
それに兄様も賛同して、急遽、父様のお帰りを家のテラスで寛ぎながら待っていただくことに

なった。
最初、僕は同席を遠慮したのだけれど、イサーク様に乞われご一緒の席に着く。
そして父様を待つ間、イサーク様がご自身の領地のことを、いろいろと話してくださる。
どの話も今暮らしているこの街しか知らない僕には新鮮で興味深いものばかりで、時間を忘れて僕は聞き入っていた。
「土地だけは広いからね、牧羊が盛んなんだ。よく屋敷の近くでも放牧しているんだけど、ある時、屋敷の中にまで放牧中の子羊が入り込んでね。どこから入ってきたんだと探したら、塀の一か所に子羊が一匹ギリギリ通れるくらいの穴が開いていたんだ」
「穴？　そこから⁉」
しかもイサーク様は落ち着いて話してみるとなかなかに気さくな方で、αだと身構えていたことも忘れて会話が弾む。
「そう、茨の生垣を掻き分けてまでわざわざ来るみたいでね。最初は塞ごうかとも思ったんだが、時たま訪れる子羊達が可愛らしくて……塞げないんだ」
少し困った顔をして笑うイサーク様は、大きな体に凛々しい顔つきに反して少年のよう。
成人男性で、ましてやαの方に対して悪いとは思いつつも、可愛いなんて思ってしまった。
屋敷に迷い込んだ子羊の前で腕を組み、今みたいに困ったように笑うイサーク様の姿が自然と頭の中に浮かんで思わず笑いが込み上がる。
突然笑い出した僕にイサーク様が動きを止め、驚いた顔をする。



しかも、ご自分のことで笑われたと気付いたのか微かに頬が赤い。
「あはは、そんなに穴を塞ぐことをためらうほど可愛いんですか？」
「あ……ああ、とても……ウォレンも一度見たら納得するよ。あんな可愛い来客を締め出すのは忍びなくてね。だから、今度屋敷で牧羊犬を飼おうかと思っているんだ」
「牧羊犬？」
「庭のね、花まで食べてしまうんだよ。一度花壇まるまる食べられてしまって。あれにはまいった。まあ、それは別にいいんだ」
「いいんですか⁉」
花壇を荒らされても別にいいとは、イサーク様はかなり寛容な方なのかもしれない。
「問題は動物にとって食べると毒になる植物も庭には植えてあることなんだ。だから、子羊達が誤って毒の花まで食べてしまわないように、牧羊犬を置いて庭の一部に入れなくしようかと思ってね。それで……ウォレンは、犬は好きかい？」
「ウォレンは小さい頃に子犬を四匹も拾ってきて、飼うんだって大泣きして家中大騒ぎにしたくらい犬が好きだよ」
「ファリオン、お前に聞いてない」
僕の代わりに兄様が答え、イサーク様が眉根を寄せて兄様を見る。
当の兄様は全く気にした素振りも見せず、澄ました顔でティーカップを傾けていた。
そんな二人のやり取りを見て、また僕は笑いが込み上げてくる。

こんなにも会話を楽しめるなんて。この一週間、塞ぎ込んでいたのが嘘みたいに心が軽い。
そしてこの数時間という短い間でしかないけれど、イサーク様がとても優しくて思慮深い方なのが分かる。
庭を荒らす子羊を追い出すでも、羊飼いに文句を言うでもなく、ただただ毒を食べたら大変だから、と考えるなんて貴族のαとは思えない穏やかさだ。
きっとこんな優しい人と結婚できたら幸せだろうな。そう、ぼんやり考えている自分にハッと気が付いて慌ててその考えを振り払う。
なんてことを僕は考えていたんだ！
瑕疵ありの僕にとって、この家から連れ出してもらえるだけでも余りある幸運なのに、これ以上の……ましてや夫夫としての幸せを夢見てしまうなんて……
自分で思っている以上に、僕はイサーク様に絆(ほだ)されてしまったようだ。
参ったな、とイサーク様と兄様にバレないように溜息を吐いた。

「旦那様がお戻りになられました」
使用人の一言に今まで弾んでいた会話がピタリとやみ、使用人が立っているテラスに続く扉へと目線を移す。
すると、そこからバタバタと足音を響かせ、慌てた様子の父様が入ってきた。
「コルトハーク伯爵様がおいでとは露知らず、大変お待たせいたしました！」



ペコペコとイサーク様へ頭を下げた後、父様は同席していた兄様を見て笑顔を見せる。
だけど、続いてその横の僕へと目線を移した瞬間、媚びた商人の顔が一転し、不快そうに眉を顰(ひそ)めて僕を睨み付けた。
一週間前には考えられない父様の視線に一瞬にして血の気が引く。
「ウォレン、なんでお前が図々しくもここにいる。申し訳ございません、コルトハーク伯爵様。すぐに下がらせますので」
忌々(いまいま)しそうな父様の声にビクリと肩が強張る。
慌てて下がろうとするけど、いまだ馴れない父様の隠しもしない嫌悪感に足がすくんで席から上手く立ち上がれない。
「父様、待ってください！」
兄様が止めるのも構わず、父様はズカズカと歩み寄り、僕の腕を掴もうと手を伸ばしてきた瞬間。
「彼を乱暴に扱うのはやめていただけるかな？」
イサーク様の手が僕の前へと差し出され、父様の手を止めた。
まさか、庇(かば)ってもらえるとは思ってもいなかった僕は、驚きのあまり言葉もなくイサーク様を見上げる。
「図々しくも私がこの席にいて欲しいとお願いしたんだ。何か不都合でも？」
父様はイサーク様の言葉に顔色を悪くすると、すぐさま手を引き、引き攣(つ)りながらも笑顔を浮かべた。

我が父ながら、こういう切り替えが早いところが実に商人らしい。
「そ、そうでございましたか。いや、コレはΩですから。何かご迷惑をおかけしていないかと思いまして……」
「Ωだと迷惑をかけるのか？」
またしてもイサーク様の冷ややかな声色に、父様の言葉が止まる。
「αでもβでも関係なく迷惑な者は迷惑だがな。その点、ウォレンは私の話をよく聞いてくれて、迷惑どころか楽しい一時を過ごせていたんだが。あえて言うなら……もう少し、誰にも邪魔をされずにゆっくり話していたかったよ」
言外に「お前の方が迷惑だ」と滲ませるイサーク様に父様は口元をヒクつかせ、「あ」とか「う」など言いながら忌々しげに僕を睨み付ける。
きっと、何か言い返したいんだろうけど、貴族相手に下手なことも言えず、言葉に詰まっているんだろう。だけど、その苛立ちを僕にぶつけられるのは八つ当たりでしかない。
「それは……それは、失礼いたしました。それで、あの、何か私にお話があるとかで」
これ以上、僕の話題を続けるのは分が悪いと察したらしい父様が僕から視線を外し、イサーク様へ問いかける。
「ああ、急で申し訳ないのだが、とても大事な話でね」
「それでしたら、応接室の方で……」
「もし、御夫人もおられるならご同席願えるかな？」



「妻も、ですか？　分かりました。すぐに呼んで参ります。それでは、お先に応接室へご案内いたしますので、さあさ、こちらへ……」
「それでは行こうか。ウォレン」
立ち上がったイサーク様が、まるでダンスに誘うかのように僕に手を差し伸べる。
その手の意味を捉えきれず、僕は目の前の手とイサーク様の顔に何度も交互に視線を走らせる。
まさか、手を取れと仰っているのだろうか？
その可能性に気付き、今までそんなことをされた経験のない僕は戸惑う。
けれど、笑顔のイサーク様に「お手をどうぞ」とまで言われてしまえば覚悟を決めなければいけない。
僕は、おずおずとその手に手を重ね、椅子から立ち上がる。
そんな僕らを見て、父様の目が大きく見開かれる。
だけど、そんな父様を気にする余裕もなく、僕はイサーク様のエスコートに膝が笑いそうになるのを必死で押し留め、足を踏み出した。
応接室までしっかりとエスコートされた僕は、イサーク様に勧められたソファーに当然のように一緒に座るように促され、緊張で身を硬くしながら座った。
父様は寄り添うように並ぶイサーク様と僕に困惑の表情で何か言いたそうにしつつも無言で向かいのソファーに座る。
「失礼いたします……あら？」

その後、やって来た母様も父様の時と同様に僕の姿を見て眉を顰める。けれど、縮こまるように座る僕の隣にイサーク様が寄り添い座っているのを見ると、空気を読んだのか笑顔を貼り付け父様の横に座った。

「それで、どういったお話でしょうか？」

「単刀直入に言うと、ご子息のウォレンを私の夫として迎え入れたい。本日はそのお願いに伺った」

「え？　……は？　……あ、あの、ウォレン……ですか？」

「ええ」

父様も母様も鳩が豆鉄砲を食ったみたいに目も口も開いたまま、信じられない様子で僕を見る。

僕だっていまだに信じられないのだから、二人がそんな顔になるのも分かる。

だからこそ、二人からの視線にいたたまれない僕は、縮こまっていた体をさらに縮こまらせて視線を下げる。

「お、お待ちください、コルトハーク伯爵様！　ウォレンはつい先日、不妊を理由に離婚されたばかりでして。それに、項に噛み痕のある番持ちでございます！　とてもコルトハーク伯爵様に釣り合うような――」

「全て承知の上での求婚だ。私にはそのどれもが問題ではない」

「……失礼を承知でお伺いいたしますが……なぜ、このウォレンをお望みなのでしょうか？」

訝(いぶか)し気に聞く父様は、心底理解できないという顔をしていた。



立ち読みサンプルはここまで

父様にとっては、僕は妊娠もできない噛み痕の付いた壊れた中古品。そんなものを欲しがるなんて、何か裏があると疑っているのかもしれない。

「突然の話でその疑問も当然でしょう。私がまだ学生の頃、何度かファリオンの友人としてお邪魔したのは覚えておられますかな？　実は、その時にウォレンに一目惚れをしてしまってね」

イサーク様の大きな手が、膝の上で固く握りしめた僕の手に重ねられる。

突然のイサーク様の行為に、驚いた僕は顔を上げてイサーク様を見上げた。

「だが、その時にはすでにウォレンには婚約者がいた。家の力を使おうかともいろいろと悩んだが、政略結婚であればそれぞれ事情もあるだろうと、その時は己の激情を押し留めたんだ。今思えばそれは悪手だった。あの時の分別を弁(わきま)えた振りをした自分に、今でも怒りを覚えるよ」

父様へ話す、というより僕に語りかけるように、イサーク様は僕を見つめたまま語る。

よくもまぁ、そんなそれっぽい話をスラスラと語れるものだと感心する。

何も知らない人間が聞けば信じてしまうんじゃないだろうか？　それくらい、僕を見つめながら語るイサーク様は真に迫っていた。

少し苦しそうに紡がれるその姿は、父様達を納得させるためのもののはず。だから……その視線に煽られ、僕の意思とは関係なしに早まる胸の鼓動は早く収まってくれ。

「今回、ウォレンが一方的に離婚されて実家に帰されたと聞き、居ても立ってもいられず、こうして求婚のお願いに参った、という訳だ」

「そう、でしたか……しかし学生の頃というと十年近くは昔……そんな長い間、これを想っていた